

そば価格変遷史

植原路郎

蕎麦普及の跡を展望

701 文武天皇、大宝元年、使を陸奥に遣わし黄金を納めさせた。一方対馬から黄金の献上あり、依って大宝と改元。この翌年、初めて岐蘇路を開く。(このことソバ伝播に関係あり)

709 元明天皇、和銅元年、武蔵国秩父郡から銅献上、和銅と改元。

712 元明天皇、和銅5年、大安万侶「古事記」を撰上する。翌年美濃・信濃の間に吉蘇路を開発。

720 元正天皇、養老4年、舍人親王ら「日本書紀」を撰上する。

722 元正天皇、養老6年、蕎麦栽培発令。このことは「続日本紀」にある。(この書は8世紀末から9世紀始にかけて編集された日本最初の蕎麦文献として重要)

740 聖武天皇、天平12年、新京をつくり、大養徳恭仁大宮と称す。更に同16年難波宮をつくり、次で同17年、都を平城(奈良)に復し、国名を大倭国に復した。

794 桓武天皇、延暦13年、山背を山城と国名変更、新京を平安京と名づけた。(これより先、延暦3年に、山背国長岡に都をおいたことがある。)

802 桓武天皇、延暦21年、富士山大爆発。関東の地質にも影響あり。

840 仁明天皇、承和7年、勸農の令下る。「蕎麦栽培はこの時にはじまる」と記した書物や、そば店の広告文を見るが、これは謬りで、さきに元正天皇の故事がある。この謬りをひろめた人物は、江戸の戯作者(小説家)蜀山人門下の宿屋飯盛こと石川雅望(天保元年歿す。享年78)

1236 四条天皇、嘉禎2年、九条道長東福寺を建立。

1241 四条天皇、仁治2年、駿河出身の鶴、円爾(弁円)宋国留学から帰国、筑前崇福寺に住し、後醍醐天皇、寛元元年(1243)東福寺住持となる。(後に聖一国師号を贈られる)(国師号の始)

1586 後陽成天皇、天正14年、秀吉に豊臣の姓を賜う。(秀吉はそばがきの愛好家、毎夜食す。)大阪「す奈は」(砂場)繁昌。

1614 後水尾天皇、慶長19年、京都方広寺の鐘成る。銘に「国家安康」の句あり。これ関東関西動乱の因。

1662 後西天皇、寛文2年、京都方広寺の大仏を木像に代え、銅銭(文銭)を鑄造する。

江戸研究家によれば、この年吉原に、うどん、そば切

の店(江戸町2丁目、仁右衛門店)の存在を報じているが、浅草寺境内の露店売りそば玉は寛文4年(1664)とされている。こうしたわずかの年代差は、よく見受けられる。

1693 東山天皇、元禄6年、江戸の人口353,500人(ただし武家、陰陽師、山伏、座頭、ゴゼ、その他を除く。)翌年松尾芭蕉歿す。(享年53)

江戸時代、8文から24文に

1664 將軍徳川家綱、寛文4年、8文、浅草寺境内でそばの玉売りはじまる。

1684~1687 將軍綱吉、貞享年間むしそば6文。

1690 將軍綱吉、元禄3年、7文の店が多い。(米一石一兩、一兩=4000文)(銀50匁に相当する)

1723 將軍吉宗、享保8年、このころ、7文~8文。享保は20年まで続いたが、それから25年後、明和(將軍家治)1764~1769にかけて、12文となる。

1791 將軍家治、寛政は1789~1800までだが、寛政3年ごろは14文、物価上昇を示して来た。

1801 將軍家斎、享和(3年間)から文化(元年は1804)にかけて、16文の気配あり、文化(1804~1817)には16文の店多く、所により安値あり。

1818 將軍家斎、文政(1813~1829)16文、食道楽は文化末期以来、盛大となり、ぜいたく品も現われ、元禄以来の派手な世相を展開。

1830 將軍家斎、天保(1830~1843)そばは16文。天保の改革(天保8年)により1文値下げ。15文。ただし、このころ、木曾路では、命令には関係なく15文であった。

1860 將軍家茂、萬延年間(1860)は1年間、そば16文変わらず。(その後も、黒船騒ぎや、世相動揺したが値段変わらず、慶応になって変動。)

1865~1867 將軍慶応元年は家斎、同2年から慶喜、そば屋は幕府に申請して20文となったが、いつのまにか、24文までせり上った。ここで明治維新を迎え、貨幣制度にも異変が起った。すなわち従来の四進法から十進法に改められた。

1兩を1円とし、これまで1兩を4分、1分を4朱、1兩は4000文であったものを、1兩を1円とすると同時に10,000文を1円、1,000文を10銭、100文を1銭と換算し、50文を半銭(五厘)とした。利子計算には厘の10分の1「毛」(もう)使用。

明治・大正時代のそば値段

そば値段は慶応の24文から、明治値段は5厘という新値が建てられた。

明治元年 (1868) そば5厘、(うどん同様) (江戸の前述の16文当時には、1両で250杯食べられたものが、1円では200杯ということになる。)

当時の米価を引合に出すと、そばの値段との比較がわかる。鉄道寮の調べでは米1升(1.18リットル)3銭8厘。先般日本国有鉄道首都圏本部広報課によれば、3銭8厘。明治に入っても、穴あき銭の寛永通宝2厘、文久通宝は1厘として通用し、天保銭は8厘と評価された。

明治10年 (1877) 8厘、西南の役の影響で、物価上る。第1回内国勸業博覧会東京上野で開催。

明治20年 (1887) 1銭、欧化主義さかん。翌年佐賀で製麵機発表。

明治27年 (1849) 1銭～1銭2厘、翌28年にわたり日清戦争。

明治31年 (1898) 1銭5厘。宴会さかん。

明治35年 (1902) 1銭8厘。日英同盟成る。翌年第五回内国勸業博覧会大阪で開催。

明治37年 (1904) 2銭。翌年にかけて日露戦争。明治38年～40年、2銭～2銭5厘。

明治44年 (1911) 3銭。所により3銭5厘。場末では丸箸を洗い直して、何度も使う店もあった。

大正元年～2年 (1912～1913) 3銭。衛生ということがやかましくなり、割箸普及。

大正4年 (1915) 前年勃発した第一次世界大戦の影響で、物価上昇。「成金」続出の兆現われる。3銭～4銭。

大正6年 (1917) 5銭。

大正7年 (1918) 6銭。富山から発した米騒動は全国に波及。米1升50銭を新聞は殺人相場と報じた。

〔国際栄養学院鈴木弘講師実見談＝この年、東京米穀商品取引所の先物相場は急騰して49円52銭?の高値をつけ現物も勿論暴騰し、民衆が米屋を焼打したいわゆる米騒動が各地で起った。暴騰の原因は大手商社神戸の鈴木商店をはじめ業者の思惑買によるものである。〕

時の農商務省が厳しく規制措置をとれば、その度毎に皮肉にも米の値段は上がる一方で何の効果もなく、一時は沈静したかに見えても翌年は更に暴騰を続けたが、あれほどの騒ぎをした国民は不思議にも沈黙した。時の至るのを待つ外はなかったであろう。〕

大正8年 (1919) 7銭。世界大戦終る。

大正9年 (1920) 8銭。

大正12年 (1923) 9銭～10銭。この値段 昭和へ続く。関東大震災起る (大正14年、メートル法公布)

インフレが影響した現代のそば

昭和元年 (1926) この年から昭和5年(1930)まで、値段変わらず。「米」代は10kg 3円30銭。

昭和10年 (1963) 10銭(店により、12銭、15銭) (すでに満州事変の影響起りはじめる) 昭和12年日華事変。昭和13年国家総動員法公布。

昭和15年 (1940) 15銭。日本紀元2600年記念祝典。

昭和16年 (1941) 16銭。第2次世界大戦に突入という前代未聞の国難。(前年から軍需産業等必要以外の不急商工業に対し、従業員数を制限し、同時に営業時間を制限。) 節米。

昭和17年 (1942) 食管理法公布。

昭和19年 (1944) 料理店系統の業者締出される。そば業界も閉店休業。

昭和20年 (1945) 3月4日および10日全国にわたり大空襲。やがて原子爆弾投下(広島、長崎)が契機となって、終戦。

昭和21年 (1946) 預金封鎖、新円切替。物価統制令。労働基準法。(米の単位は1俵60kgとなる。)

昭和25年 (1950) 15円という値段で、久しぶりの蕎麦らしいもの登場。

昭和26年 (1951) 17円。

同 28年 (1953) 20円。

同 29年 (1954) 25円。

同 30年 (1955) 30円。

同 35年 (1960) 35円。

同 38年 (1963) 40円。

同 40年 (1965) 45円～50円。

同 41年 (1966) 50円。

この5円刻みの値上げも、この辺で止り、漸次上昇。

昭和43年 (1968) 70円。

同 44年 (1969) 80円。

同 45年 (1970) 100円。

同 47年 (1972) 130円。

同 48年 (1973) 150円～200円に上昇の気配を示す。

〔昭和49年(1974) 通例170円。次で200円台を基準とする傾向にあったが、上昇の気配更に激増。〕